

追憶の医師達

寺田寅彦

青空文庫

子供の時分に世話になった医師が幾人かあった。それがもうみ
 んなとうの昔に故人になつたしまつて、それらの記念すべき諸国^こ
^{くしゅ}手の面影も今ではもう朧^{おぼろげ}気な追憶の霧の中に消えかかつてい
 る。

小学時代にかかりつけの家庭医は岡村先生という当時でももう
 相当な老人であつた。頭髪は昔の徳川時代の医者のような総髪を、
 絵にある由井正雪^{ゆいしょうせつ}のようにオールバックに後方へなで下ろして
 いた。いつも黒紋付に、歩くときゆうきゆう音のする仙台^{せんだい}平^{ひら}の
 袴姿であつたが、この人は人の家の玄関を案内を乞わずに黙つて
 いきなりつかつか這^{はい}入つて来るといふうちよつと変つた習慣の持主

であつた。

いつか熱が出て床とこに就いて、誰も居ない部屋にただ一人で寝ていたとき、何かしら独り言を云つていた。ふと気が付いて見るといつの間に這入つて来たか枕元に端然とこの岡村先生が坐つていたので、吃驚びっくりしてしまつて、そうして今の独語を聞かれたのではないかと思つて、ひどく恥ずかしい思いをした。しかし何を言つていたかは今少しも覚えていない。ただ恥ずかしかつた事だけはつきり想い出すのである。もちろん云つていた事柄が恥ずかしかつた訳ではなくて独語を云つていた事が恥ずかしかつたのである。

五、六歳の頃好きな赤飯を喰い過ぎて腹をこわした結果「脳のうま

膜くきんしょう「衝」きづかという病気になって一時は生命を氣遣われたが、この岡村先生のおかげで治ったそうである。たぶん今云う疫癘えきりであったろうと思われる。死ぬか、馬鹿になるか、と思われたそうであるが、幸いに死なずにすんでその代り少し馬鹿になったために、力に合わぬ物理学などに志して生涯恥をかくようになったのかもしれない。とにかく命を助かったのはこの岡村先生のおかげである。

岡村先生が亡くなって後は小松という医者いしやくの厄介やくがいになった。老先生と若先生と二人で患者を引受けていたが、老先生の方はでっぷりした上品な白髪のお茶人で、父の茶の湯の友達であった。たしか謡曲や仕舞しまいも上手であったかと思う。若先生も典型的な温雅

の紳士で、いつも優長な黒紋付姿をかかえぐるま抱車の上に横たえていた。うちの女中などの尊敬の対象であったようである。その若先生が折々自分の我わがまま儘な願いに応じて「化学的手品」の薬品を調合してくれたりした。無色の液体を二種混合するとたちまち赤や黄に変り、次に第三の液を加えるとまた無色になると云ったようなのを幾種類か用意してもらって、近所の友達を集めては得意になって化学的デモンストラチオンをやって見せたのであった。いつかこの若先生のところでも顕微鏡を見せてもらって色々のプレパラトをのぞいているうちに一つの不思議な重大なアポカリプスを見せられた。後で考えてみたらそれは人間のスペルマトゾーンの一集団であったのである。それからまた珪藻けいそうのプレパラトを見

せられ、これの視像の鮮明さで顕微鏡の良否が分かると教えられた。その後二十年たつてドイツのエナでツアイスの工場を見学したとき、紫外線顕微鏡でこの同じ珪藻の見事な像を蛍光板の上に表示されたとき、この幼い記憶が突然甦つて来るのを感じたのであった。

十二、三歳の頃ひどくからだが弱くて両親に心配をかけた。そのためその頃郷里でただ一人の東京帝国大学卒業医学士であったところの楠先生の御厄介になることになった。この先生はたいていいつも少し茶色がかつた背広の洋服に金縁眼鏡で、そうしてまだ若いのに森有^{ありのり}礼^{れい}かりンカーンのような髯^{ひげ}を生やしていたよ
うな気がする。とにかくそれまでにかかった他の御医者様の概念

とはよほどちがった近代的な西洋人風な感じのする国手であつた。父が話し好きであつたからたいいの医師は来るとゆつくり腰を据えて話し込んでしまふのであつたが、この楠先生もよくお愛想に出した葡萄酒の杯を銜ふくんだりして、耳新しい医学上の新学説などを聞かせてくれたような記憶がある。この人の話した色々の話の中で今でも覚えているのは、外科手術に対して臆病な人や剛胆な人の实例の話である。あるちよつとした腫物はれものを切開したただけで脳貧血を起して卒倒し半日も起きられなかつた大兵肥満の豪傑が一方の代表者で、これに対する反対に気の強い方の例として挙げられたのは六十余歳の老婆であつた。舌癌ぜつがんで舌の右だか左だかの半分を剪断せんだんするといふので、麻酔をかけようとしたら、

そんなものは要らないと云つてどうしても聞かない。それで麻醉なしでこの出血のはなはだしし手術を遂行したが、おしまいまでいつこうに平気で苦痛の顔色を示さなかつた。その後数ヶ月たつて後にまた残りの半分の舌がいけなくなつた。今度は麻醉をかけようかと云つたら、やはり承知しないのでまた素面しらふで手術を受けてとうとう完全な舌切婆さんになつたということであつた。その後がどうなつたかは聞かなかつたような気がする。

その頃、自分の家ではあまりかからなかつたが、親類で始終頼んでいた横山先生という面白い医者があつた。畸人きじんという通称があつたが、しかし難儀な病気の診断が上手だと云う評判であつた。ある時山奥のまた山奥から出て来た病人でどの医者にも診断のつ

かない不思議な難病の携帯者があつた。横山先生のところへ連れて行くと、先生は一目見ただけで、これははじきに直る、毎日上白米を何合ずつ焚いて喰わせると云つた。その処方通りにしたら数日にしてこの厄介な奇病もけろりと全快した、というのである。この患者は生れてその日までまだ米の飯というものを喰つたことがなかつたという話であつた。

小松の若先生でも楠先生でも、もし無事だったらまだ生きておられてもいい年輩であつたが、二人とも壮年で亡くなられた。そうして大人になるまで生きるかどうかと氣遣われた自分が、これらの先生方のおかげでどうにか生き延びて、そうしてこれらの人達よりも永生きをしているわけである。

(昭和十年一月『実験治療』)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第五巻」岩波書店

1985（昭和60）年12月5日第2刷発行

初出：「実験治療 第一五六号」

1935（昭和10）年1月発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※初出時の署名は「吉村冬彦」です。

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waizora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

追憶の医師達

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>